

これからしばらくの間、「サステイナビリティと資源の分配」というちょっと難しいようなタイトルで、みなさんにお付き合いいただきたいと思います。その中で、結局、私が言わんとしていることは一つです。サステイナビリティを有効な概念に仕立てていくためには、歴史を学ぶこと、とくに歴史の中の多様に学ぶことが重要である。これだけでも、歴史はこの仕事が簡単でないことを教えてくれます。

「サステイナビリティ」とは、歴史とは反対に将来について語るものであると考える人も多いでしょう。サステイナブルな開発とは、「将来の世代のニーズを満たす能力を損なうことなく、今日の世代のニーズを満たすような開発」と定義をした一九八七年のブルントラント報告は、将来世代を思いやる重要性を高らかに謳っています。しかし、当たり前のことですが、将来は過去と現在によって形成されています。将来に向けて何ができたのかは、これまで何ができたのか、できなかったのか、に深く関係しているのです。

こともありません。実は私も学生の頃は、教師に同じ質問をしていました。しかし、勉強を進めるうちに、複雑な社会問題の「解決」は決して普遍的なものではなく、誰かにとっての解決に過ぎないということがわかってきました。だとすると、一見、不合理な政策が採られたとしても、そこには何らかの理由があるはずで、その理由を掘り下げることの方が、繰り返して同じ角度からの「処方箋」を出すよりも着実な前進につながるのではないかと考えるようになりました。前向きで目立つ行動だけが評価されがちな今日、歴史の教訓を生かして、余計なことをしないことの価値も見直される必要があります。たいていの「問題」は、過去にってしまったことの尻拭いに他ならないわけですから。

タイで見た 森林をめぐる謎

私の調査経験に即して具体的な話をしましょう。一九五〇年代のタイの森林面積は国土の六〇%くらいを占めていたのですが、現在

歴史の中に未来を見出す

佐藤 仁

東京大学大学院助教授
(国際協力学)

急いで白状しますが、私は歴史の専門家ではありません。歴史に関心をもつようになったのは、恥ずかしながら最近のことなのです。これを読んでくれている多くの学生諸君と同じように、私も過去よりは「未来」こそが大事だと考えていました。しかし、途上国の開発の歴史を学び、その実態に触れるにつれ、「開発はどうあるべきか」を論じるよりも、開発はどうあったか、をわきまえることの方が重要だと思ふようになりました。サステイナブルでない世界に誰がしたのかを考えていくと、世界経済の枠組みを規定してきた先進諸国の発展のあり方、そして植民地統治に端を発する援助の歴史を見直すことになるのです。途上国に向けて発信していた「提言」は、実は自分たちも問題の一部であるという事実から目を逸らしたものに他ならない、と気づきました。

歴史に考察の矛先を向けると、現在の問題の「解決策」からは遠ざかるような気がしますが、「解決策はなんですか。批判してばかりではダメですよ」と、学生にたしなめられる

は二〇%に満たないと言われています。面積の推移を見る限り、タイの森はサステイナブルとはいえない状況だったわけです。ところが、森林を統括的に監督するタイ政府の森林局の予算とスタッフは、森林が急減した同じ時期に数倍にも膨れ上がっていました。つまり、森林局は組織としてはきわめて「サステイナブル」であったのです。なぜこんなことがおきるのでしょうか。例えば、森林保全の大きな障害のひとつと言われているのが乾季に各地で頻発する山火事です。山火事の原因については諸説あるのですが、政府の公式見解では山火事の多くは地域住民による焼畑によるとされています。

私は以前、政府のこの公式見解について、悪者にされている村人たちがどう考えるか、インタビューをしたことがありました。そのときに聞いて驚いたのです。私がインタビューしたある村人は、かつて国立公園の中で「消火隊員」として日雇いのアルバイトをしていたそうです。彼が言うには、山火事があるときの日当は、何もないときの日当の一・

●連載講座● サステイナビリティと資源の分配 1

五倍だということです。そこで、隊長は隊員たちの給料を増やす目的で、ときどき放火をして仕事を作っているというのでした。問題の増大は、さらなる予算獲得の口実として使われます。そして、国立公園という政府の直轄地の中では、どんなことが起こっても一般の人に知られることはありません。もちろん、この事例がどれだけ一般性をもつのかはわかりません。しかし、問題を作り出すことによって繁栄するような行政組織の構造があるとすれば、そうした組織に技術や資金の援助を続けても、森林保全は遠ざかる一方でしょう。森林は単に動植物の生息場所として保護が必要な場所ではありません。そこは、さまざまな利権が生み出される場所でもあるのです。

一見、「中立的な」学者の提案も注意して聞かなくてはなりません。森林について言えば、次のような「解決策」が一部の経済学者から提示されることがあります。人々が森を農地に転換するのは、農地の経済価値が相対的に高いからである。森を守りたければ、森の経済価値を上げよ、という提案です。この

木の持ち出しも許されない、いわば「二重の迫害」を受けてきました。機会と負担の分配という観点から見ると、開発の時代も、環境保護の時代も同じような構図だったので。かつて暮らしていた森が「世界遺産」に指定されたために、そこから追い出された彼らは強引に狭い土地に押し込められました。狭い土地では、それまでのような焼畑移動耕作は機能しません。やむをえず肥料を入れて、換金作物栽培を始めた彼らの前に、先進国の専門家が現れて「環境にやさしい」農業を教えるというのです。そもそもサステイナビリティを奪ったのは誰か、と問いたくなります。

「誰のサステイナビリティか」

タイでの観察は、サステイナビリティを考えるうえで大切なヒントを教えてくださいます。森林がどのような意味において「資源」であるのかは、資源を見る眼によって異なるということです。そして、現場の問題は、必ずしも現場の人々によって引き起こされているわけではありません。私たちは、現場の



スマトラ沖地震の津波被災地での
現地調査。右端が筆者。

提案は、エコツーリズムや薬草の発見など、具体的な処方箋を伴うので魅力的なのですが、森の価値が高まると何が起るのか、歴史ははつきりと教えてくれます。森が生み出す富は、その価値が高まるほど、企業や政府といった権力の手に集められていくということです。問題は森の価値が相対的に低いことではなく、生み出される価値の分配が極めて不公平であるという点なのです。価値を上げてから貧しい人々に再分配するというアイデアがうまく機能したためしはありません。むしろ、価値ある資源のそばに暮らす人々に、資源の価値を直接還元する制度設計が必要です。

私がフィールドワークをしていたタイ中西部にカレンと呼ばれる人々が暮らしています。カレンとは、タイの中西部から北部山岳部にかけて生活している少数民族で、長い時間をかけて、森と密接な関係を構築していた人々です。ところが、彼らは七〇年代まで盛んだった大きな木の伐採の便益にあやかるともできなかっただけでなく、環境保護の時代になつてからは森の中での居住はおろか小さな

人々を問題視し、解決策を外からもつてくる援助するという発想に慣れきっています。しかし、現場をとりまく基本的な構造と「問題」が作られる背景を理解しないと、どんな政策もうまくはいきません。そして重要なことがもう一点あります。それは上のいずれの問題も、技術や財源が不足しているから起こったものではないということです。

サステイナビリティをめぐる議論が説得的であるためには、「何のサステイナビリティか」だけでなく、「誰のサステイナビリティか」をまず問うことが必要です。そして、サステイナビリティを論じなくてはいけない世界になぜ至ってしまったのか、冷静な分析が必要で、そのときに重要なのは、「問題」をとりまく多様な人々の生存原理と、そこから生じてくるインセンティブを考えるということです。「資源の分配」という切り口は、この分析を進めるうえでとても役に立つものです。それでは、今回は「資源」という概念に着目してお話しましょう。